

書評

“The happy prince and other tales”
Oscar Wilde

川勝 万規子

小さい頃、自らを犠牲にして貧しい人々を助け
ていく王子様の像とツバメの童話を読み、感動さ
れた方も多いのではないのでしょうか。本書の代表
作“ The happy prince ”は「幸福の王子」という
タイトルで和訳され、日本でもたくさんの人々に
愛されている童話です。

この本が書かれたのは19世紀末のイギリス、ヴ
ィクトリアニズムの時代でした。作者のオスカ
ー・ワイルドは、ヴィクトリアニズムの道徳の犠
牲に反発し、芸術や美を表現しようとしてしま
した。奇抜なファッションで、ウィットに効いたジョ
ークを次々に話すダンディ、オスカー・ワイルドの
ポーズは当時の人々を驚愕させました。彼の童話
からだけではあまり想像のつかないこのポーズ
は、この時代の社会に対するものです。当時は、
実用性のないものは無用であるという考え方が浸
透していたため、芸術や美は排除される傾向に
ありました。重んじられたのは道徳心、しかし実際
は形ばかり善人を装う偽善者を多く輩出させて
いました。ワイルドの作品の大半は、このような英
国スノップを風刺・批判し、自由や美の尊さを表
現しているものであり、その精神はこの童話にお
いても同様です。「美」を求めた彼の作品は、文
体、テーマ、表現、全てにおいてとても美しいも
のです。

本書は童話ですが、大人が読んで也十分に興味
深く、芸術作品と言えるものです。文章の響きは
歌のように耳に心地よいものですし、先程も述べ
た英国スノップを風刺した場面も多々見られま
す。また、何よりもワイルド作品の「美しさ」が、
童話という無垢なものを表現することで、より純
粋に高められているという印象を受けます。

ストーリーは、塔の上に立つ幸福の王子の像が、
町の貧しい人々の暮らしぶりを見て悲しみ、やっ
てきたツバメに頼んで自分のルビーや金ばくを運
んでもらうことで、人々を幸福にしていく...とい

うものです。貧しい人々
を、自分の身を削って救
おうとする王子の像は、
だんだんと金ばくがなく
なって鉛色になり、みす
ぼらしくなっていきま



す。金でおおわれ、人々から美しいと称賛されて
いた王子の像が、みすぼらしくなることは、最初
は無垢なものであった美が、社会の悪に冒されて
しまったことを表現していると考えられます。し
かし、王子とツバメの心からの愛は、何よりも美
しく尊いものとされ、最後には神様によって救わ
れることで、無償の愛が勝利します。純粋さが一
度、社会悪によって冒された後、より高められ
て現れるのです。一見、善悪についての道徳的な
物語のようにも思えますが、偽善的道徳を嫌った
ワイルドのこの作品は、決して善・悪を押しつけ
がましく説くものではありません。物語の中で、
俗物的な人間の愚かしさと美しい愛をワイルド流
に対比させることで、心に訴えかけてくるのです。
何かにつけ装飾的であることを好んだワイルド
が、一番純粋に表したかったことは、実はこの童
話に描かれているような「心の美」だったのかも
しれません。

京都外国語大学図書館には、この他にも様々な
児童図書があります。図書館ホームページの「図
書館作成データベース」内にある、児童図書のコー
ナーから検索すれば、たくさんの童話が見つかり
ます。児童文学に興味をお持ちの方はもちろん、
子どもの頃に読んだ童話をもう一度読んでみたい
という方にも、是非利用していただきたいです。
懐かしさの中に、新しい発見もあるかもしれませ
ん。また、“ The happy prince ”のように、日本
語で知っている童話の原語版もおもしろいと思
います。複雑な文法や表現があまり出てこないの
で読みやすいですし、童話ならではの優しい雰
囲気を感じ取ることができます。本書にも、“ The
happy prince ”の他数編が収められています。是
非、オスカー・ワイルドの美しい童話の世界を味
わってみてください。

かわかつ まきこ（英米語学科 4年次生）